様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月３１日現在

機関番号：17401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007　～　2010
課題番号：19530876
研究課題名（和文）　社会資源過少地域における就学前障害児支援システム構築に関する実践的研究
研究課題名（英文）　Practical Study for Developing a Support System for Preschool-aged Handicapped Children and Their Families in an area where Less Social Resources

研究代表者
肥後　祥治（HIGO SHOJI）
熊本大学・教育学部・准教授
研究者番号：90251008

研究成果の概要（和文）：
社会資源が非常に少ない地域における障害のある子どもの療育システム作りに寄与するために、地域に根ざしたリハビリテーション(CBR)の視点に基づく療育プログラムの提案とその有効性の検討が必要である。本研究では、障害が疑われる１才半から５才の前幼児とその保護者を支援するために、保護者プログラム、子どもプログラム、ボランティアプログラム開発に取り組んできた。いずれのプログラムも、効果的であることが、母親の評価、子どもの変化、ボランテアの知識量等の変化のデータ分析から明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
It will be very difficult to plan to build up a support system for preschool-aged infant with disabilities and their families in an area of less social resources without idea of community-based rehabilitation. The purpose of the study was trying to develop a package of support programs, such as for parents, for children and for volunteers. Especially this study focuses on infants the age 1.5 to age 5. After four year trails, the programs we developed were very effective judging from the date of evaluation by parents, behavioral changes of infants, and increased amount of knowledge of volunteers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：就学前療育プログラム・システム構築・ＣＢＲ

１．研究開始当初の背景

障害の早期発見・早期治療といったコンセプトの下、我が国のマス・スクリーニングシステムは整備されてきた。また、乳児におけるマス・スクリーニングシステムに続く乳幼児健康診断の制度も、先に挙げたコンセプトの下、実施されてきている。早期発見のシステムが実を結ぶ中で、先のコンセプトの早期治療にあたる部分は、成果を上げてきているかについては、議論の余地が残る。この傾向は、社会的資源の少ない都市部といわれていない地域に行けば行くほど強くなるといえる。その理由はいくつか考えられるが、障害の診断等に関する経験的知識や技術的な発展と支援システムの構築に関する研究の遅滞といったアンバラスが大きな理由の一つであると考えられる。では、この支援システムの構築に関する研究の遅滞を招いているものは何であろう。本研究は、そこには以下にあげる２つの根本的問題が、横たわっているという視点に立っている。

①専門家及び専門的知識に対する盲目的信頼とそれによる非専門家の無力化

②現在の地域療育システム作りのパラダイムの機能不全

高度に分業化された先進国においては専門家の存在意義やその機能を否定することは不可能であり生産的ではない。しかし、専門家によるサービスのみを意味のある活動と権威付けすることになると非専門家による類似のサービスの無力化を導きかねない。そのようになると、専門家の布置や施設設備といった顕在的社会資源の絶対量に大きな格差が存在する中では、意味のあるサービスを得るために専門家の訪問や出現を待つといった先の見えない期待をする方向性をとりやすくなる。またこのような厳然と存在する格差が有りながら、地域療育システム作りを都市部と同様に施設を作り専門家を雇用することのみで進めていうとすると、その財政的基盤の脆弱性等の問題からシステム作りが進められないといった現在の療育システム作りのパラダイムの問題がある。

この２つの問題点は不可分的に結びついているが、肥後（2003）は、これらの問題を解決する糸口として、途上国のリハビリテーションの推進パラダイムとして活用されている「地域に根ざしたリハビリーション（CBR)」の可能性を指摘している。

２．研究の目的

本研究では上記２つの問題点の存在を意識した地域療育システム作りの方法を模索し、提案することを目的している。そして研究の中心なコンセプトとして CBR の考え方を据えることとし、具体的な取り組みやプログラムの開発を基本におきながら、実践的な研究を指向した。

研究は、以下の流れにそって実施を行う。

①長期にわたって行われてき地域の療育プログラムの分析に基づき、非専門家に実施可能な療育内容、療育技法を整理し、本研究で計画するプログラム（親子支援プログラム）の概要を作成する。

②親子支援プログラムを構成する３つのサブプログラム（

③作成したプログラムの臨床実験（意義および効果の測定）

④プログラムのマニュアルの試作

３．研究の方法

(1)研究実施の概要

研究は、３段階、５期（分析期、Ⅰ期～Ⅳ期）に分けられ、それぞれの目的は、表１に示したとおりであった。

表１　研究の各段階における目的と活動

段階	期	目的と内容
１段階	分析期	既存ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの分析
２段階（1.5 才～3 才対象）	Ⅰ期	1.5 才～３才用の保護者・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ・子どもﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの試作と試行
	Ⅱ期	上記ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの修正と試行
３段階（３才～５才対象）	Ⅲ期	３才～５才用の保護者・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ・子ども用ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの修正と試行
	Ⅳ期	上記ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの修正と試行

(2)第１段階（分析期）

ある地域において長期にわたって継続されている２つの療育プログラム（1970 年代中盤から継続されている）の内容と方法について調査を行い。その中でも多く長期間にわたって、用いられた内容を明らかにすることで、子どものプログラムの流れや枠組を構成する資料として用いた。また、保護者プログラムの内容を検討するために、専門的な知識や技能を研修させるタイプのプログラムから保護者の対話や、ファシリテーターによるグループ活動を中心としたプログラムの内容の分析を行った。

(3)第２段階（Ⅰ期～Ⅱ期）

①　Ⅰ期：この期の研究は、分析期の資料を手がかりに子ども用プログラムと保護者プログラムの試案を策定、地域の保健センターへの掲示と就学前幼児担当の保健師に趣旨

を説明し、気になる保護者へのプログラムの紹介を依頼した。また、プログラムの実施に際して、プログラムに参加するボランテア（大学生）に母親プログラムを参考したボランテアプログラムに参加してもらった。保護者プログラムと子どもは、同時並行して行われた。１回、約２時間を内容のものを１週間に１回の割合で６回実施した。表２は、１回のタイムスケジュールである。

表２　タイムスケジュール（Ⅰ期）

	子ども	保護者
10:10-10:25 (15)	1.はじめの会	
10:25-10:55 (30)	2.みんなでする活動	親プログラム
10:55-11:50 (40)	3.個別活動	
11:35-11:50 (15)	4.ボランテアと保護者の話し合い	
11:50-12:00 (10)	5.おわりの会	

この期の対象者は４家族・子ども５名（内２名は兄弟）であった。母親プログラムの内容は表３に示した。また、プログラムの各回において、満足度と改善点について保護者の４段階（大変そう思う～全く思わない）で評定を行う質問紙への回答を依頼した。また、６回目の「プログラムへの参加を振り返りましょう」の際実施したフォーカスグループ・インタビュー（以後 FGI）の結果は、KJ 法を用いて内容の分析を行った。また、子どもプログラムの評価は、活動中の子どもの変化の分析を行った。また、ボランティアに対しても子どもプログラム終了後 FGI を実施し、その内容を整理した。

表３　保護者プログラム（Ⅰ期）

	テーマ	内容と目的
1	知り合いになりましょう。	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ.ﾎﾞﾗﾝﾃｱと知り合う.保護者同士の他己紹介、聞く時の約束を確認。
2	「お子さんが生まれてからのこと」についてお話ししましょう。	子どものことを話す経験をする。人から聞いてもらえる経験をする。自分と子どもの関係をふりかえる。
3	「こんな時どうすればいいの？」を話し合ってみましょう」	関わり方で難しいと感じること、どうすればいいかわからないことをみんなで話し合い、問題解決の方法を学ぶ。
4	「私と子どもの１週間」こんな風にすごしました！「専門家を読んで話を聞く」	１週間の出来事や、その中で工夫したこと、などをふりかえる。他のメンバーの関わりをきき、自分と違ったアイデアに気づく。分からないことを専門家に聞く経験をする
5	お子さんの姿を除いてみましょう	子どもとボランティアが関わっている様子（個別活動）を第３者的に観察する経験をする。
6	プログラムへの参加を振り返りましょう	話し合いの内容や感じたことについてフォーカスグループ・インタビューの手法を用いてはなしあってもらう。

②　Ⅱ期：この期は、Ⅰの実施を受けて修正を加えたプログラム（保護者プログラムと子どもプログラム）の試行と、Ⅰ期の実施後、参加したボランティアの意見より、ボランティアプログラムの大幅な修正とその効果についての検証が行われた。

Ⅱ期に作成されたボランティアプログラムの概要は、表３に示した通りであった。このプログラムは、90 分間の講義または演習（グループワーク中心とする）を１日に４回、２日間にわたって行う形態で実施された。ボランティアプログラムの効果は、実施前後において「参加者の実態把握(3)」「自分自身が子どもに関わるにあたっての自分自身へのイメージ(5)」、「自身のコミュニケーションスキルやパターンへの意識(10)」「幼児の発達の知識(35)」「幼児へのより良い関わり方への知識(15)」によって構成されるアンケートを実施し、その前後の変化を検討した。

また、保護者に対しては、Ⅰ期で使用した質問紙への記入を毎回依頼した。また、子どもプログラムの評価は、子どもの行動面の変化を指標としてその変化を追跡した。

この期の対象者は、４家族・子ども４名であった。

表３　ボランティアプログラム内容（Ⅱ期）

	テーマと方法
①	「趣旨説明」：CBR の意義と本プログラムとの関連
②	「遊びたいこと・不安なこと」：KJ 法を用いたグループワーク
③	「共感の大切さ・傾聴のスキル」：講義と演習
④	「子どもの発達の概要」：講義と演習
⑤	「子どもたちの行動と大人の関わり方」：講義と演習
⑥	「子どもとコミュニケーションを進めていく鍵」：講義と演習
⑦	「話し合いでの問題解決：インシデントプ

	ロセス法」：演習
⑧	「振り返り」：フォーカスグループインタビュー

(4) 第３段階（Ⅲ期～Ⅳ期）

① Ⅲ期：第２段階（Ⅰ期～Ⅱ期）において、1.5 才～３才向けのプログラムの立案と修正をおこなった。そこで第３段階（Ⅲ期～Ⅳ期）においては、３才～５才向けのプログラムを 1.5 才～３才向けのプログラムをベースに立案・試行し修正するために実施された。また、ボランテアプログラム（Ⅱ期）の修正が行われ、表４に示す内容がⅡ期と同じ時間設定の中で実施された。また、Ⅲ期においては、ボランテアプログラムの中でグループ活動の中でリーダーを行う者を事前に指定し、ファシリテーター研修を実施しその効果についてアンケートおよび FGI を実施して検討する資料を収集した。

保護者および子どもプログラムに参加した対象者は、４家族・子ども４人であった。プログラム評価は、Ⅱ期の手続きに準じた。

表４　ボランティアプログラム内容（Ⅲ期）

	テーマと方法
①	「趣旨説明」：CBR の意義と本プログラムとの関連
②	「遊びたいこと・不安なこと」：KJ 法を用いたグループワーク
③	「聞き上手になりたい」：講義と演習
④	「話し上手になりたい」：講義と演習
⑤	「子どもの発達の概要」：講義と演習
⑥	「子どもたちの行動と大人の関わり方」：講義と演習
⑦	「子どもとコミュニケーションを進めていく鍵」：講義と演習
⑧	「話し合いでの問題解決：インシデントプロセス法」：演習
⑨	「振り返り」：フォーカスグループインタビュー

② Ⅳ期：Ⅲ期の試行過程で指摘された問題点（保護者、子ども、ボランティアプログラム）を修正しその効果の検討を行った。プログラム評価は、Ⅱ期の手続きに準じた。保護者および子どもプログラムに参加した対象者は、４家族・子ども４人であったが、兄弟児の参加で子どもプログラムのスタート時点では、６名のスタートであった。

また、Ⅳ期においては、一般に募集して保護者等に実際にボランティアプログラムに参加してもらい、その内２名に子どもと共に、保護者、子どもプログラムに参加してもらった。

４．研究成果

(1) 研究の第１段階と第２段階の成果

第１段階の成果を元に、第２段階のⅠ期、Ⅱ期のプログラム立案及び修正、そしてその有効性の検証をおこなった。Ⅰ期の試行においても、保護者プログラム、及び子どもプログラムは、それぞれ満足度が高く、子どもの行動面の変化も具体的に観察できるレベルで現れていた。Ⅱ期は、このⅠ期のプログラムの効果や評価を安定したものにし、保護者のニーズに対応できるように、６回の実施から８回の実施への拡張する修正が成された。以降、このプログラムが保護者プログラムの基本となった。表５がその概要である。

表５ 保護者プログラムの概要（Ⅱ期～）

	活動名・内容	目的
1	知り合いになりましょう ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの概要，他己紹介，ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱとの情報交換	お互いに知り合いになる 話の聴き方の提案 子どもの情報の提供
2	「お子さんがうまれてから，についてお話ししましょう」 話し合いと，Sharing	子どものことを話す経験 自分と子どもの関係を振り返る
3	「こんな時どうすればいいの」子どもに係わるよりよいｱｲﾃﾞｱを話合う，一週間の過ごし方の作戦を立てる	お互いの係わり方について，話し合う中で問題解決を行う。ﾒﾝﾊﾞｰを相談できる相手と意識できるようになる。
	「5～7 回のﾃｰﾏを考えよう」	自分たちでﾃｰﾏを考えることで，参加者のﾆｰｽﾞに沿った内容になる。
4	「私と子どもの１週間-こんな風に過ごしました」 先週の話を基に１週間の生活を振り返る 専門家の話を聞く	子どもとの係わり方を振り返る 他者のｱｲﾃﾞｱに関心を持つ 専門家に尋ねたいことを聞いてみる
5～7	「自分たちで決めたﾃｰﾏに取り組みましょう」 例：ｽﾄﾚｽ発散法，ｱｻｰｼｮﾝな自己表現，周囲の社会的資源を	ｸﾞﾙｰﾌﾟで決めたﾃｰﾏに取り組むことで保護者は主体的に活動に参加する。お互いの知恵を出し合って活動することは参加者のｴﾝﾊﾟﾜｰﾒﾝﾄにつながる

	調べよう,専門家の話を聴こう,もっと仲良くなろう	
8	ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ参加への振り返りをしましょう ﾌｫｰｶｽ･ｸﾞﾙｰﾌﾟ・ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ	自分の経験や感じたことを話すことで,ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ参加への意味を振り返る
4・7	お子さんの姿をのぞいてみましょう時間の後半にﾎﾞﾗﾝﾃｨｱとの係わりを見学し,子どもとの関わり方･遊び方などを話し合う。	子どもの姿を第三者的にみる 自分以外の人と子どもに関係を見る経験をする

また、Ⅱ期には、ボランティアプログラムがより整備され、コンパクトで効果的なものになったことが、参加者の評価や知識や認識の変化から理解できるが、修正点も指摘されていた。

(2) 第３段階（Ⅲ期～４期）の成果

第３段階は、第２段階で作成された子どもプログラムを３～５才に拡張するための研究であった。Ⅲ期はこのことに加え、ボランテアプログラムの修正とファシリテーター研修の追加が行われ、ボランテアプログラムの全体が完成することになった。ボランティアプログラムの概要は、表４に示してあり。ファシリテーター研修の内容は、表６に示すものであった。

表６ファシリテーター研修（Ⅲ期）

時間	活動名	内容
14:00-14:10 (10)	趣旨説明	オリエンテーションとアイスブレーク
14:10-14:20 (10)	講座１	ボランティアプログラムの内容説明、FA 研修の趣旨説明
14:20-14:50 (30)	講座２	FA について学ぼう FA についての基本知識を学ぶ
15:00-16:00 (60)	講座３	各グループワークでの注意点の確認
11:50-12:00 (10)	アンケート	プログラム評価

保護者プログラムに対する評価は、Ⅲ期、Ⅳ期とも満足度も高かった。子どもプログラムは、集団活動の内容の修正により、より発達年齢に応じた活動を誘導できることがわかったが、大枠の修正は必要なく、参加した幼児の行動面での変化が観察され、このことに対する保護者からの高い評価も受けることができた。

Ⅳ期は、障害のある保護者のボランテアプログラムへの参加の意義と今後の可能性を検討する研究が実施された。ボランティアプログラムに参加した後に保護者と子どもプログラム（親子支援プログラム）に参加したこと対象の保護者は、「自分の知識が増え、頑張ろうという気持ちが湧いた」と感じていた。これらのことから、ボランティアプログラムの受講は、親子支援プログラムに参加しやすい状況を作ることにもなり、両方参加することは保護者の子育てへの前向きな意欲を引き出すという、エンパワーメントにも繋がることが分かった。しかし、この参加した２名はプログラムに有用性を感じていたが、実際に自分達でプログラムを運営していくことに難色を示していた。そのため、ボランティアとして活動することへの不安が軽減するような配慮が求められることも分かった。

(3) 今後の課題と展開

本研究の実施で、専門家への依存を極力廃することを目的とした就学前の障害のある保護者、子どもを支援するプログラムとそれらを支援するボランテアの養成プログラムの枠組が完成したと考えられる。今後は、このプログラムの実際の地域での運用の可能性を検証する段階に入ると思われる。これらのプログラムのフィールドにおける有用性とそのための条件を検討しながら、地域の療育システムを構築してくために必要な基本的概念とツールの研究を進めていく必要がある。また、一連の研究活動を通してプログラムのマニュアルの雛形ができている。検討を加えより利用しやすいものに高めていく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 宮本佳代子・福田沙耶花・肥後祥治．CBR 保護者支援プログラム（第三期）の効果の検証－．熊本大学教育学部紀要，人文科学，59，2010･12，1-8．査読無し

② 福田沙耶花・宮本美哉・肥後祥治．CBR 保護者支援プログラム（第二期）の効果と改善点－半年後のフォーカスグループインタビューの分析から－．熊本大学教育学部紀要，人文科学，58，145-157．

2009 年，査読無し
③ 肥後祥治．地域における特別支援教育体制の構築戦略の分析とその運用．情緒障害教育研究紀要,27,242-250,2008 年,査読無し
④ 肥後祥治・宇都宮絢子．熊本県内の地域子育て支援センターの現状と課題－障害児とその保護者の支援の観点から－．熊本大学教育学部紀要，人文科学,57,113-120,2008 年，査読無し
⑤ 岩橋亜侑美・肥後祥治．ＡＤＨＤが疑われる幼児に対する社会的行動の改善の試み．熊本大学教育学部紀要，人文科学，57，2008･12，121-127．査読無し
⑥ 肥後祥治．教育実践を支援するための学校の組織化－その必然性と組織化への方略．肢体不自由教育,180,4-9,2007 年,査読無し

〔学会発表〕（計１０件）
① 垂水透太・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第Ⅲ期(4)－療育ボランティア養成プログラム作成に関する研究２－．日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文集，長崎大学，584,2010 年 9 月 19 日．
② 宮本佳代子・福田沙耶花・岩橋亜侑美・垂水透太・前田浩志・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第Ⅲ期(1)－発達に気がかりな子どもをもつ保護者への早期支援プログラムの効果の検証－．日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文集，長崎大学，416,2010 年 9 月 18 日．
③ 百田好香・星野真好・長岡侑子・熊川理沙・吉田明美・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第Ⅲ期（２）－子どもの集団活動プログラムを中心に－．日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文集，長崎大学，418,2010 年 9 月 18 日．
④ 長岡侑子・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第Ⅲ期(3)－子どもの個別活動プログラムでの一事例について－．日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文集，長崎大学，417,2010 年 9 月 18 日
⑤ 前田浩志・宮本美哉・肥後祥治．療育ボランテア養成プログラム作成に関する研究－２日間短期集中プログラムの立案と有効性－．日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集，宇都宮大学，239，2009 年 9 月 20 日．
⑥ 岩橋亜侑美・宮本美哉・百田好香・半田健・前田浩志・垂水透太・宮崎亜紀・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第Ⅱ期(1)－第Ⅱ期プログラムの特徴と保護者支援プログラムの結果の概要－．日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集，宇都宮大学，236，2009 年 9 月 19 日．
⑦ 百田好香・半田健・宮本美哉・岩橋亜侑美・前田浩志・垂水透太・宮崎亜紀・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第二期(2)－子どもの集団活動プログラムを中心に－．日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集，宇都宮大学，237，2009 年 9 月 19 日．
⑧ 半田健・百田好香・宮本美哉・前田浩志・垂水透太・岩橋亜侑美・宮崎亜紀・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第二期(3)－子どもの個別活動プログラムを中心に－．日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集，宇都宮大学，238，2009 年 9 月 19 日．
⑨ 岩橋亜侑美・肥後祥治．ADHD が疑われる幼児に対する個別指導の研究．日本特殊教育学会第 46 回大会発表論文集，鳥取大学・島根大学，684，2008 年 9 月 21 日．
⑩ 肥後祥治・楢木野薫・筒井迪子・宮本美哉．CBR の考えに基づく親子支援プログラムの開発の研究(1)　－１歳半から３歳までのハイリスク児のための試行プログラムの概要と結果－．日本特殊教育学会第 46 回大会発表論文集，鳥取大学・島根大学，727，2008 年 9 月 20 日．

〔図書〕（計２件）
① 肥後祥治．明治図書，子どもたちの抱える行動上の問題への挑戦．2010 年，108．
② 肥後祥治．明治図書，豊かな生活につながるコミュニケーションを育てる．2010 年，141．

６．研究組織
(1)研究代表者
肥後　祥治（HIGO　SHOJI）
熊本大学・教育学部・准教授
研究者番号：90251008

(2)研究分担者
干川　　隆（HOSHIKAWA　TAKASHI）
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：90221564

(3)連携研究者
衛藤　裕司（ETO HIROSHI）
大分大学・教育福祉学部・准教授
研究者番号：00284779